退官記念・最終講義より

家政学からの飛翔を目指して
—生活調査から生活美学へ—

For a Soar from Home Economics
- From Survey to Esthetics in everyday life -

横川公子　武庫川女子大学　教授

Kimiko Yokogawa　Professor, Mukogawa Women's University

はじめに

去る 3 月 20 日，年度末のしかも卒業式当日という，何かと晴れがましい活気が漂う中，最終講義という大それた企画を設定していただき，まことに有難うございました。一か月前にお話をいただき，折に触れて，どのようなことを申し上げようかと思いつつ，その日を迎えましたが，大学を卒業して以来の越し方を省みるよい機会になったように思います。

大学を卒業し，大学院に進学するという時に，研究の道に入ろうということを私なりに胸に抱きました。その時から今日につながる道程を，まったくの駆け足ですがお話ししましたので，そのあらましを以下述べさせていただきます。

1. 出発の出発（三つの道程）

1-1　家政学とは何ぞや！—家政学原論研究会発足

家政学部被服学科の内容は魅力的だった。しかしその内容に正面から取り組む教官はほとんどいない。高分子化学や繊維物理学，色彩学，等々。そのことについて疑問を持つ学生もあり，当時，開設間もない大学院の先輩たちの中で，「家政学とは何ぞや」について議論する研究会を発足し，学外の研究者にも声をかけて読書会や雑誌会を始めていた。遠くから眺めていたが，大学院に進学し，その動きを引継ぐことになり，さらに学外に連携した組織が立ち上がった。

当時，ドメス出版の支店が大阪市の中之島にあり，討論の場を提供してくれた。ドメス出版は，現在も生活研究に関する出版を精力的に推進している出版社だ。この関西家政学原論研究会には，奈良女子高等師範学校時代にすでに，こうした問題意識をもって，『家政学原論』をいち早く上梓しておられた，黒川喜太郎先生が毎回出席され，先生には，その後亡くなられるまで私淑することになった。また当時，日本女子大学々長であった大橋広先生も一日来阪され，ドメス出版の狭い椅子に挟まって，日本における家政学のメッカの香りに触れたりもした。

ついでながら，大橋先生に次ぐ（記憶違いがなければ）日本女子大の学長は氏家寿子先生で，この方も家政学原論学者であった。氏家先生は，後に最初の勤務先・金蘭短期大学に数年にわたって集中講義にきていただき，家政学会・家政学原論研究部会でもしばしばお目にかかった。

1-2　文化史への期待と憧れ—生活の中の価値意識 への目覚め

文化史へのあこがれは入学当初からあった。一方，科学的に考える重要性を，たとえば衣服製作の実習（教員養成のために伝統的におかれていた科目）の中で，作り方そのものではなく，なぜその形態にするのか，なぜその技法を用いるか，何故その素材を選ぶのか等を科学的に考える方法について，徹底して論究していたのが新鮮だった。またわかりやすかった。時代的にも 1960 年代後半というのは，科学と技術が科学・技術ではなく科学技術というテクノロジーとして注目された時代で，私の本棚にも武谷三男・星野芳郎といった技術史分野の著書が並んでおり，そういった言論活動に感化された時代だった。

同時に，京都市立芸術大学彫刻科の野崎一良先生による「造形論」「デッサン」という授業があった。後に『美術解剖学』（西田正秋著）という本をお借りして，衣服の造形性に目を開かされた。野崎先生は，大学院で文化史に方向転換して四苦八苦している私を，京都大学人文科学研究所の吉田光邦先生に引き合わせてくださった。

1-3　科学する面白さに遭遇

卒業論文は，とりあえず明快に思えた被服材料の力学的特性に関する研究に取りくんだ。のちに，風合い研究の世界的な第一人者となった丹羽雅子先生，それと加地芳子さんという原論研究会を立ち上げた先輩の居る研究室だった。加地芳子さんは，京都教育大学で定年を迎えた方だが，附属高校々長も兼任され，消費者教育の面で，文科省や他の審議会にも専門委員として活躍された方である。ともかく脇目も振らず研究に没頭するという雰囲気の研究室に遭遇し，生活を実存的に研究することに対する志が固まった時期であった。こういった方々の事に触れるのは，行先がなかなか定まらない私の研究生活でも，その道程の節目々々で，すぐれた良き先達との出会いがあり，大きな支援を受けたということを改めて思うからである。それは公的なものに留まらず，私的な学恩とでも言ってよいものも含め，研究生活は卒業論文の所属研究室から始まった。

『（関西）家政学原論研究会』では，「家政学とは何ぞや」について，対象論・方法論・体系論・キー概念等々を議論した。その成果として，執筆分担した以下の刊行物がある。

・長島俊一編『家政知を考える』執筆分担，昭和堂，1988
・宮下美智子編『家政学のキー概念』執筆分担，大阪教育大

キーワード：文化史，服飾美学，生活財，道具

学，1999

研究会は，大学院時代から武庫川女子大学異動後まで継続し，本学への異動のきっかけにもなった生活美学・生活調査への関心につながるものだった。また研究会の立ち上げとそのマネージメントに早くから関わらせていただき，そこでの問題意識を同じくする人々との出会いは，同学の士として生涯にわたる交流の場となり，研究生活にとって宝物になった。その出発は家政学原論研究会だったといえる。

1-4　被服学の可能性—文化史・服飾美学から生活美学へ

当時，科学技術とのかかわりの強かった被服学の可能性を探ることは，私にとって文化史・服飾美学に注目することであった。大学院修士課程で，この方面に舵を切る。そのころの試行錯誤は，以下のような報文に窺える。

- 既製服時代における被服学の可能性-社会における家政学-，金蘭短期大学研究誌 5 巻，1971，pp.71-85
- 現代短期大学気質と家政学における展望（金蘭短期大学研究誌 6 巻，1975，pp.117-140 など

上記の研究は，以下へと発展した。

- 礼書にあらわれた衣生活の規範に関する研究，大阪私立短期大学研究報告集 11 集，1975
- 服飾における倫理と美意識 1 町人道にみる有徳と服飾（査読論文），服飾美学（服飾美学会誌）1979，pp.47-62

このころから，京都芸大の元井能先生を囲んで，関西地区に内外の研究者が集まって服飾美学研究を進めるようになっていた。美学会が推進している領域拡大の流れに載るようになっていたと思う。その注目は，その後の科学研究費の採択に反映した。

- 「服飾における美的様式の問題」，昭和 53-54 年度科研費総合研究（C）（研究代表者：元井能〔京都芸大〕，研究分担：筆者ほか）
- 「服飾における美的表現の問題」00531010，昭和 55-57 年度科研費総合研究（A）（研究代表者：55-56 年度村上憲司〔京都女子大〕，57 年度元井能〔京都芸大〕，研究分担：筆者ほか）

共同研究の分担者として参加した私は，研究会推進の幹事役をまかされた。また根底にあった家政学の社会的使命や家政学の規範的性格への関心（衣生活・服飾を対象として）は，その拠り所として歴史の発掘調査につながった。京都における職人工芸の調査もその一つだ。

つまり，文献調査のみならずフィールド調査に拠り所を拡大し，そうしたコミュニティへの参加型調査に遭遇した。科学研究費による取り組みに参加し，幹事として研究進展の実務を担当し，当時は PC が普及しておらず，会計も報告書作りもすべて手作業だったが，この時の経験は，後に外部資金を申請したり共同研究を立ち上げたりするときのノウハウや仲間づくりにつながり，その後の学会活動や研究会活動の基盤になった。課題は，服飾の表現の問題から出発した。今日的には表象芸術としての服飾に注目することになった。それは，ひいては生活美学の入り口になった。また学会への投稿を中心とした研究活動，学会査読論文作成の時代となった。それらの成果は，のちにいくつかの出版物にもなった。

- 近代洋装の受容-制度上の対応－：査読論文，服飾美学（服飾美学会誌）14 巻，1985，pp.66-85
- 近代洋服の受容-幕末から明治初年の展開-：査読論文，服飾美学（服飾美学会誌）15 巻，1986，pp.51-63
- 西鶴町人物における服飾（2）：査読論文，風俗（日本風俗史学会誌）29 巻 4 号，1990，pp.1-24
- 西鶴町人物における挿絵の服飾（一）　男装と女装の枠組み：査読論文，風俗史学（日本風俗史学会誌）152 巻，2003，pp.1-17
- 西鶴町人物における挿絵の服飾（二）　尻からげ：査読論文，風俗史学，改題 22 号，2004，pp.20-51

上記研究は，以下へと発展した。

- 『服飾表現の位相』，横川公子編著/昭和堂，1992，全 230 頁
- 『服飾を生きる—文化のコンテクスト—』，横川公子編著/化学同人，1999，全 186 頁
- 人絹の開発からファッション化まで—人絹が繰り広げた世界—『日用品の２０世紀』，近藤雅樹編/ドメス出版，2003
- 人絹とミシン『衣と風俗の 100 年』，日本生活学会編/ドメス出版，2003，pp.22-54
- 『テキスト生活美学』，光生館，1999，全 190 頁

2. 生活美学の展開

関心は服飾に留まらず，生活の美学に広がり，拠り所としての生活調査が改めて課題となった。そのような流れで，科学研究費による研究支援を，ほぼ途切れることなく受けることができた。研究分担のみでなく，代表としての取り組みも増えてくる。

- 平成 7 年度～平成 9 年度 科学研究費補助金基盤研究（B）（2）『生活美学の原理と展開』：代表者 多田道太郎→平松幸三+生活美学研究所研究員・関係者，分担課題：「生活美学の系譜」　「素材の味わいということ」
- 生活美学の歴史：朝日新聞社「アエラ・ムック」『ファッション学の見方』，1997
- 生活美学：朝日新聞社「アエラ・ムック」『生活科学がわかる』，1998
- 平成 9 年度～平成 11 年度 科学研究費基盤研究（C）（2）『生活材料の感性ダイナミックスとその工学的応用』：代表者 上田充夫（京都工芸繊維大学），分担課題：「素材の時系列変容と生活文化のダイナミックス」
- 「人絹の開発からファッション化まで—人絹素材が繰り広げた世界—」
- 平成 13 年度～平成 15 年度科学研究費補助金基盤研究（C）『儀礼環境の伝統と変容』：代表者 横川公子
- 平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金基盤研究

（C）『服飾におけるジェンダーの比較文化的研究』：代表者 佐々井啓（日本女子大学），分担課題：「服飾におけるセクシュアリティー『とりかえばや』をめぐってー」

3. 生活調査

生活調査の道程を振り返ってみると，本格的な取り組みは 20 代後半にはじまった。私にとって，その後の研究生活に大きく影響を受けたと思われるのが，吉田光邦先生との出会いだった。吉田先生が精力的に進めておられた伝統工芸調査の一端に加えていただいたわけである。毎週 1 回，3 年間にわたって京鹿の子絞りの現場を訪問し，記録した。このとき，京都市中京の絞り問屋から乙訓･竹田・大原野・・・西院等々の町衆や職人さんの暮らしを知る。京都の地理と行事を追体験する。その成果は，以下に収録されている。

・吉田光邦編『京鹿の子－美と伝統－』　京都絞り工業組合，のち淡交社より刊行 1975.03

この時，下職（鹿の子結～絞張り，桶，絞り針，型彫，染め）から製品化の全体を現場調査によって記録する。地方（有松，鹿角，仙台）の絞り調査，日本の絞りの歴史，世界の絞りも視野に入れている。フィールド・文献調査，調査報告会，執筆をとおして共同研究を経験する。

文献調査中心で学会投稿の時代のころに多田道太郎先生をはじめ，国立民族学博物館藤井龍彦先生　佐藤浩司先生との出会いがあり，多くの先達と遭遇することとなり，生活調査を継続する。

3-1　生活調査の展開―その 1

本学大学院修士課程の非常勤講師として，学芸員養成のための科目を担当しておられた佐原 真先生（はじめは奈良文化財研究所）が国立歴史民俗博物館長となり，そこで衣服研究の同志として朝岡康二先生を紹介していただく。その延長上で民博の 20 世紀研究に加わることになり，山口昌伴先生との出会いがあり共同研究を立ち上げ，参加するようになる。 その成果は，以下に報告されている。

・2002 年　日中比較道具文化研究会中国調査（西蔵）道具学会
・2002 年度～2004 年度　国立民族学博物館共同研究プロジェクト「モノに見る生活文化とその時代に関する研究―国立民族学博物館所蔵大村しげコレクションを通して―」
・2003 年　韓国東海岸主要都市における生活道具と着衣調査　道具学会
・2003～2004 年　能勢地域調査　トヨタ財団研究助成特定課題「近代化と暮らしの再発見」（峠の会を立ち上げる）
・2004～2005 年　能勢地域調査　トヨタ財団研究助成特定課題「近代化と暮らしの再発見」（峠の会）
・同上，出版助成（進行中）

3-2　生活調査の展開―その 2

普通の生活を対象とする研究が学術助成の対象として採択される。

・2004 年度～2006 年度 科学研究費基盤研究（B）（1）『暮らしにおけるモノと人との相互的関係に関する生活文化学的研究―国立民族学博物館所蔵大村しげコレクションをめぐってー』：研究代表：筆者（共同研究者：藤井龍彦・佐藤浩司・山口昌伴・石毛直道・熊倉功夫・相川佳代子・森理恵・井上雅人・角野幸博・磯映美・大塚滋）

上記の研究は，大村しげについての研究へと発展していき，以下の出版につながった。

・大村しげ　京都町屋くらし，筆者編著，2007（図 1）
・2004 年度～2009 年度 文科省私立大学学術研究高度化推進事業「関西圏の人間文化についての総合的研究ー文化形成のモチベーションー」サブプロジェクト「関西におけるファッション（衣）文化の形成」：研究代表　横川　（共同研究者：森理恵・井上雅人・青木美保子・村田裕子・徳山孝子・藤本純子・松井寿・山本泉・平光睦子・松本由香）

上記の研究は，関西圏における洋裁文化の研究 へと発展していった。

・2005 年～2006 年 サントリー文化財団人文科学・社会科学に関する研究助成『現代日本の生活文化における食玩（おまけ）の位置―食玩を通して見る時代と生活文化―』：研究代表　横川　（森田雅子・山本泉・北村薫子・西田徹・櫻谷かおり・遠藤久美子・岡田春香・坂井加奈）

図1　大村しげ　京都町屋ぐらし，編著：筆者，ランプの本，2007

図2　生活をデザインする，編著：筆者，光生館，2011

上記の研究は，食玩研究へと発展していった。

・2006 年 門倉貿易株式会社研究調査助成『繊維製品リサイクルモデルの研究』：研究代表　筆者，（生活環境学科教員および助手）

上記の研究は，生活文化研究へと発展していった。

3-3　生活調査の展開―その３

前述の研究活動は，新たに以下へ発展した。

・2012 年度～2014 年度 科学研究費基盤研究 C『モノに見る現代日本の生活文化と歴史の発掘及びその活用―中田家の生活財コレクションをめぐって―』：研究代表　横川（藤井龍彦・佐藤浩司・佐藤優香・森理恵・村瀬敬子・加藤ゆうこ・荒井三津子・井上雅人・他）

以上は，ミュージアムサロンの開催や，生活文化資料特別展―大村しげの台所からの発信―へと発展した。

また，生活環境学科を中心に内外の研究者に執筆を呼びかけ，以下を実現した。

・生活をデザインする，筆者，光生館，2011（図 2）
・生活の美学を探る，編共著，光生館，2012（図 3）
・生活を科学する，筆者，光生館，2014　（図 4）

これらは，武庫川女子大学の特徴ある教育活動の一環として知られる共通教育科目において，学部学科を越えた学生に教科書としても活用されている。

総じて普通のモノや暮らしを対象とした生活研究は，方法論が確立しているわけではないと言われている。しかしそのありふれた対象に未来的な幸福と夢を託そうとする研究仲間や同志に恵まれ，研究会の形を作ってきた。生活研究は，理系と文系の複合的視点によって取り組むべき，未来的な課題だと思う。

換言すると，以下のように言い換えられるのではないか。

「モノに注目してよりよく生きる営みの意味を探求することにより，モノ調査は未来に向かう生き方を確かにし，補強する。
モノの生産にむけて有益な示唆をすることができる。
モノの特徴は調査の視座に対応して多様な意味を織りだす。
モノは歴史を語るよりどころとなる　・・・」と。

このような着目と蓄積が私たちの未来を幸せにするならば，学問になるということである。また，こうした小さい積み重ねを見ている眼があって，学術の世界というのも捨てたものではないという感慨もある。

多くの良き先達に巡り合い，内外の仲間や後輩の参加があり，生涯を通じての同学の士ともいうべき同志ができたことを幸せに思っている。また共同研究体制とそれを支えた研究助成の確保―工業組合・国立民族学博物館・科学研究費・その他の外部資金の支援を受けられたことも研究と教育の活動を支えてくれた。その延長上に学会での活動もあり，そのことが細やかながら，社会的・全国的な学術振興の活動に携わることに結びついたと思う。研究活動を進める上で学会活動の重要性は申すまでもないが，同学の志を得，後進を育て，大学の未来に創造的にかかわっていくうえでも欠くことができない大学教員の業務だと思う。

結び

生活の中のモノに注目し，生活文化というありふれた世界を対象として，文献調査とフィールド調査の両面から，未来的な予兆を探ろうとしてきました。私の課題，主要なテーマは，近世から現代までを視野に入れた生活文化の近代化（伝統の継承と変容）の探求にあり，いまだ道なかばにあります。

皆様のご教示を，今後ともよろしくお願い申し上げます。

なお，故多田道太郎先生に誘われて生活美学の森に迷い込んだことが，私の後半の大学生活を彩り，課題を指し示してくれました。ここでは，詳細について触れていませんが，その学恩に心より感謝を申し上げて，筆を置かせていただきます。

付記

本稿は，2015 年 3 月 20 日，生活環境 1 号館別館にて行われた横川先生の退官記念講演をもとに，おまとめ頂きました。現在，横川先生は，特任教授として引き続き講義をご担当になられるとともに，付属ミュージアム設置準備室の室長としてご活躍です。長年にわたる，教育・研究活動に感謝申し上げるとともに，ますますのご活躍を祈念申し上げます。（編集事務局）

図3　生活の美学を探る，編著：筆者，光生館，2012

図4　生活を科学する，編著：筆者，光生館，2014